



司法面接支援室通信



(2013. 3. 1. 発行)

2012 年度 特別版



【代表者からのご挨拶】

研究協力登録者のお子様、保護者の皆様には、本年度も司法面接研修や調査において、たいへんお世話になりました。

専門家を対象とした司法面接研修では、道内外の児童相談所の心理司、福祉司の方々、そして全国から来られた警察官の方々の演習に「面接を受ける役」としてご協力いただきました。常日頃子どもの安全や防犯に関わっておられる専門家でも、子どもから直に話を聞くというのは特別なことです。お子さんがキャンパスで行った活動（散歩やゲーム）について、聞き方の工夫をしながら、面接を行いました。

調査もたくさん行われました。「詳しく話す、ざっくり話す」という報告の仕方、「まず話し、1週間後に再度話す」という面接の繰り返し、「人形を使って話す、言葉だけで話す」という説明の仕方、「お母さんに話す、お父さんに話す」といった報告相手による違い等、多くの調査にご協力いただきました。

お子様、保護者の方々のご協力なしには、研修も研究も進みません。本当にどうもありがとうございました。どうぞ来年度もよろしくお願い申し上げます。この成果を研究の発展と安心して暮らせる社会作りに活かしてまいりたいと思います。

どうもありがとうございました。

北海道大学大学院文学研究科教授 仲真紀子

■ 今年度ご協力いただいた研究

- 4 月 ★ 親子会話調査（昨年度 1 月より継続 ～ 6 月まで）
- ・対象: 3 歳～15 歳までのお子様およびその保護者
 - ・協力者: 研究協力登録者 56 名 と その保護者 89 名 にご協力いただきました。
- ★ 出来事の報告における練習の効果と学年差の調査（昨年度 1 月より継続 ～ 9 月末まで）
- ・対象: 小学 1 年生, 4 年生, 中学 3 年生
 - ・協力者: 研究協力登録者 55 名 と, 札幌市内の中学校 1 校から 5 名 にご協力いただきました。
- ★ 「だいたい」と「正確」の質問に対する報告の調査（昨年度 1 月より継続 ～ 9 月末まで）
- ・対象: 小学 1 年生, 4 年生
 - ・協力者: 研究協力登録者 71 名 と, 札幌市内の小学校 4 校から 49 名 にご協力いただきました。
- 6 月 ★ 26 日 (火) 北大 司法面接研修
- ・対象: 小学生
 - ・協力者: 研究協力登録者 5 名 にご協力いただきました
- 11 月 ★ 12 日 (月) 北大 司法面接研修 第 1 クール
- ・対象: 小学生
 - ・協力者: 研究協力登録者 5 名 にご協力いただきました。
- ★ 聞き方の調査（11 月 ～ 継続中）
- ・対象: 小学生
 - ・協力者: 札幌市内の小学校 3 校から 54 名 にご協力いただきました。
- 1 月 ★ 21 日 (月) 北大 司法面接研修 第 2 クール
- ・対象: 小学生
 - ・協力者: 研究協力登録者 5 名 にご協力いただきました。



2012 年度 活動報告

■ 北大 司法面接研修

北海道大学構内にて、6月・10-11月・12-1月の3回、全国の児童相談所職員・警察官などを対象に、司法面接法の訓練を行う研修を実施しました。

その中の模擬面接で、札幌市立琴似中央小学校のお子様計15名に、被面接者役としてご協力いただきました。面接終了・帰宅後にはアンケートを書いていただき、お子様の視点からの面接の印象を教えてくださいました。

緊張しながらも面接者の質問に誠心誠意で答えていただき、終了後には面接の様子を思い出してたくさんアンケート用紙に書いてくださったお子様の皆様、ご協力ありがとうございました。また、お子様を快く送り出してくださった保護者の皆様にも心から感謝申し上げます。

(荒川順子)



■ 出来事の報告における練習の効果と学年差

子どもが何らかのトラブルに遭遇した場合、子ども本人が警察などで事情を聞かれることがあります。その際、「それはおじさんだったのよね？」などの誘導質問で得られた証言は、裁判では証拠としての価値が低くなるため、できる限り誘導しない形の質問（オープン質問といいます）で事情を聞かれる可能性があります。

今回の調査では、このオープン質問によって、子どもがどれくらい自発的な報告をできるか、また、練習によって報告が変化するかを、学年を変えて調査しました。

協力者 小学校1年生、小学校4年生、中学校3年生の各20名（男女10名ずつ）、計60名にご協力いただきました。

方法 調査前にあった出来事の報告と、視聴したDVDの内容の報告をしてもらいました。1週間後に再度、その日の調査前にあった出来事の報告と、1回目とは違うDVDを視聴し、内容の報告をしてもらいました。

結果 出来事の報告とDVDの報告、どちらにおいても、「〇〇について教えてください」という“誘いかけ”のオープン質問が、全学年を通じて最も多くの報告を引き出していることがわかりました。

これは、過去に行われた国内外の研究と同じ結果でした。しかし、小1の報告は、小4と中3に比べると少ない量でした。また、どの学年にも、1回目の出来事報告に練習の効果が認められ、その後の報告量が増えました。小1の練習効果も大きかったのですが、オープン質問への応答は、小1には必ずしも簡単ではないこともわかりました。

私たち大人は、「子どもには自発的な報告はできないだろう」と思い、つい、最初から誘導質問をしてしまいがちですが、実際には、小1の子どもでも、誘導しない質問に応じる能力があるのです。ただ、今回の調査でわかったように、オープンな質問に上手に応じられるようになるには、学年が低いほど、練習をしておいた方がよいようです。トラブルに巻き込まれないのが一番なのですが、子どもとの普段の会話の中で、「学校であったことをお話しして」「体育館で遊んだことを、もっと詳しく教えて」といった質問を意識して行うことは、万が一の時に、子どもが事実を自発的に話すのに役立つかもしれません。そして、子どものお話の内容を一緒に楽しむことで、親子のコミュニケーションが更に深まるかもしれません。

(五十嵐典子)

■ 「だいたい」と「正確」の質問に対する報告

子どもから話を聞く時には、「だいたいでもいいので教えて」という大まかな内容の報告を求める質問と、「できるだけ正確に教えて」と詳細な内容の報告を求める質問があります。この調査では、質問に応じた異なる詳細さで、子どもは報告できるのかを調査しました。調査 1 では、「だいたい」と「正確」の質問をそれぞれちがう子どもに、調査 2 では、「だいたい」と「正確」の質問を連続して同じ子どもに尋ねています。2 つの調査を実施したのは、子どもは「だいたい」「正確」の意味を、単独で捉えているのではなく、対比の中で捉えているかもしれないからです。

【調査 1】

協力者 小学校 1 年生 39 名と小学校 4 年生 36 名にご協力いただきました。

方法 右のような図版をまず 1 分間見てもらいました。その後、ある子には「～～でしたか？だいたいでもいいので教えて下さい」と、別の子には「～～でしたか？できるだけ正確に教えて下さい」と尋ねました。右の図版は個数と色を報告する課題です。その他に、長さと場所を報告する課題もありました。

結果 個数を報告する課題で、「だいたい」と質問された時に“12 個ぐらい”や“10 個から 15 個”などの幅のある粗い回答が多く報告されました。しかし、その他の課題では、質問に応じた詳細さの回答はあまり報告されませんでした。

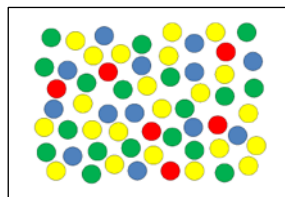
【調査 2】

協力者 小学校 1 年生 23 名と 4 年生 22 名にご協力いただきました。

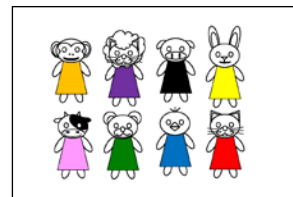
方法 課題は調査 1 と同じです。調査 2 では、はじめに「だいたい」と尋ねた後に「正確」と尋ねるパターンと、はじめに「正確」と尋ねた後に「だいたい」と尋ねるパターンを設けました。

結果 調査 1 と同様に、個数課題では「だいたい」と尋ねた時に粗い回答が多く報告されました。また、色、場所を報告する課題では、「だいたい→正確」と尋ねた時に、最初の「だいたい」では“黄”“緑”など普通の回答が多かったのが、後の「正確」で、“明るい黄”“暗い緑”という詳細な回答が多くなりました。特にこの傾向は 4 年生で顕著でした。

以上の研究から、小学 4 年生は「だいたい→正確」の順で質問をすると、後の「正確」でより詳細な回答を報告すると言えます。両学年の違いは「だいたい」「正確」の意味の理解の違いなどを反映しているのかもしれませんが。（佐々木真吾）



個数を報告する課題



色を報告する課題

■ 誰が子どもから話を聞き出すべきか？

事件に巻き込まれた子どもから話を聞く際、特別な技術を持つ専門家が面接を行う必要があります。しかし、そうした専門家の下に子どもを連れて行くことをためらうかたは多いのではないのでしょうか。その背景には、“子どものことは親が聞くべきだ”という気持ちを持つ保護者、あるいは周囲でもそのように思う人が多いからではないかと考えられます。そこで、子どもから話を聞き取る能力の高さと聞き取るべき義務という 2 つの観点から、子どもを持つ人（保護者）と持たない人（大学生）計 209 名を対象に、意識調査を行いました。その結果、子どもの有無にかかわらず、母親の聞き取る能力が最も高く評価され、義務は母親と父親とで同程度だと判断されていました。一方、専門家の能力や義務は保護者よりも低く評価されていました。

では、実際に、専門家による聞き取り方と保護

者による聞き取り方との間にどのような違いがあるのでしょうか。この意識調査を実施した際、保護者のかたには同時に、ご自身のお子さんとの会話を録音させていただきました。現在、この会話を内容分析し、親子の会話の特徴を検討している最中です。その結果報告は、また別の機会にさせていただきます。（田鍋佳子）



ご協力いただきました皆様、
本当にありがとうございました！

2012年10月10日より、一家でドイツ・ミュンヘンで生活しています。我が家は子どもが三人。長女が10歳、次女は5歳、そして三女が3歳です。下二人に手がかかるので、必然的に長女に対しては放任状態。一人で地下鉄に乗って小学校に通学しています。しっかりした娘とはいえ、まったく言葉も通じない異国での単独行動はやはり心配。毎日、何事もなかったかとハラハラしながら娘の帰りを待つ日々です。

ある日のこと。帰宅した娘の一言にドキリ。

「今朝は地下鉄が来なくて大変だったよ」

この日は早朝に地元の送電所で爆発事故があり、大規模な停電のため交通ダイヤが大幅に乱れたのでした。

「どうやって学校に行ったの？」

「電光掲示板がさ、よりによって学校に行く方面のホームだけ消えてさ」

「うん、それで？」

「だから、電車が来ても、行き先がわからなかったよ」

「うん、それで？」

「それでね…」



と淡々と状況報告を続ける長女。普段の生活から「それで?」「それから?」と自発的発話を促す司法面接技法を私に試され慣れていた娘は、ハプニング時の周囲の状況報告もいたって冷静かつ客観的。おかげ

で、娘の置かれた状況を正確に把握することができ、今後同様な状況に置かれたときにどう対処したらよいか、適切なアドバイスを与えることが出

来ました。司法面接の技法は、日常の生活の中でもとても役立つものです。

日常生活での親子の会話では、ついつい親が会話をリードしがちです。「それって、つまりこういうこと?」と要約したり結論を先取りしたり、「あ～あ、ダメじゃない」と感情的に評価をしたり。昨年度から実施している親子会話調査のデータを概観しても、親が主導となる発言は多くみられました。もちろん、そのこと自体は決して悪いことではありません。言語表現が不十分な子どもは、親の話す言葉を手本としながら、より正しい表現や規範を学びます。また、親が子どもの気持ちを汲み取る形でリードすることは、“自分の気持ちをわかってもらえている”という子どもの安心感に繋がるでしょう。

しかし、年齢が上がるにつれ、自分の状況を相手に察してもらう、という受け身的なコミュニケーションだけではなく、より積極的かつ客観的で正確に、自分の状況を相手に伝えなければならない必要性も増えてきます。行動範囲が広がるにつれ、思わぬトラブルに遭遇したり、新たな人間関係の中でこれまでの常識が通じず戸惑うことは、決して異国での生活に限った話ではありません。そうした時に、普段の日常生活の中で、自発的かつ客観的に他者に話す習慣があるかどうかが大きく影響してきます。自分の身に何が起こったのか、なぜそのような状況になったのかを周囲の人に正確に伝えることができれば、その対処についての適切なアドバイスを受けることができると思います。

是非お子さんに、「今日、何があった?」と問いかけてみてください。そして、「それってつまり…」と意見したくなる気持ちをちょっと抑えて、ひたすら「うん、それで?」「それから?」とお子さんの自発的な報告を促してみてください。思いがけないくらい、色々な情報が得られるかもしれません。

(特別研究員 田鍋佳子)

2013年度 お子様 研究協力者 募集中

当プロジェクトでは、幼児から中学生まで、広くお子様の協力者を募っています。子どもの発達に関する心理学研究に興味関心のある方、あるいは協力者としてご登録いただける方は、どうぞ下記のホームページをご覧ください。

新学術領域研究・法と人間科学 「子どもへの司法面接：面接法の改善その評価」
〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学大学院 文学研究科内
電話/Fax: 011-706-2306 e-mail: kodomo@let.hokudai.ac.jp
HP: <http://child.let.hokudai.ac.jp/>

